

陸軍の軍縮と軍国化への道

平成15年8月2日・高根台公民館

きようは先月お話しした「海軍の軍縮」に続いて、「陸軍の軍縮」の話をしめます。大正十一年二月のワシントン会議で、日本は戦艦など主力艦について、いわゆる「五・五・三」、アメリカやイギリスの五に対して、日本は三と六割の比率を受け入れました。第一次世界大戦が終わり、「戦争はもうこりこり」という平和待望ムードもありましたし、深刻な戦後不況も始まっていました。全権の海軍大臣加藤友三郎は、このまま競争で軍艦を造り続けていたら日本の財政は破綻してしまう。世界の趨勢、日本の国益を冷静に判断して軍縮に踏み切ったのですが、この海軍の軍縮は当然のことながら、「海軍がやったのだから陸軍も」と、陸軍にも軍縮を求める強い世論を生むことになりました。

陸軍はいわば世論に押される形で、大正十一年と十四年の二回にわたって九万三千人の兵力を減らしたのですが、それは明治国家誕生以来、「富国強兵」を合い言葉に膨張に膨張を重ねてきた陸軍としては初めてのことであり、また画期的なことでもありました。軍縮と云えば、まあ誰だって戦争を避けるための平和路線を頭に思い浮かべます。ところがこの時、その裏ではそうした定義とは全く正反對に、中学校以上の学校に軍事教練を導入するなど、昭和に入って軍部独裁につながる軍国化路線が着々と敷かれていたのです。この筋書きを作って実行に移した人物こそ、これまでの話にも何度か登場した陸軍大臣の宇垣一成です。

ワシントン会議の開催が決まった時、陸軍は警戒しました。議題は海軍の軍縮であつても、自分の所も軍縮を迫られるのではないかと。そこで陸軍は「一兵たりといえども減らさない」と強硬姿勢を見せたのですが、結局ワシントン会議の議題から陸軍は外されました。軍艦は数さえ減らしておけば、戦争になつたからといって、急に建造出来るものではありません。海軍の軍縮は戦争を防ぐ抑止力になります。陸軍の場合は簡単に戦時動員出来ます。いくら普段の軍隊を減らしておいても、余り意味がないというわけです。

ところが、これがかえって国内の世論を反発させることになりました。軍需景気に沸いた大正バブルがはじけ、慢性的な不況が始まっている時です。陸軍が盛んに口にしてきたロシアの脅威にしても、革命で帝政ロシアが倒れ、当面大きな軍備を持つ理由がなくなっていました。それなのに、陸軍だけがのほほんとしているのはおかしい。大正十一年二月一日、陸軍の大御所・山県有朋が亡くなつたのと歩調を合わせるようにして、陸軍は政党の集中砲火を浴びることになつたの

です。野党の憲政会、国民党に続いて、与党の政友会も陸軍の軍縮を求める建議案を提出しました。衆議院は三月二十五日、「陸軍は各種機関を統合して、年間経費四千万円を節減せよ」と云う決議案を圧倒的多数で可決し、陸軍大臣の山梨半造も「整理を検討中である」と、答弁せざるを得なくなったのです。

この間、政権も目まぐるしく代わっていました。ワシントン会議の直前、政友会の原敬首相が東京駅で暗殺され、代わった高橋是清首相も政友会の内紛で総辞職し、首相にはワシントン条約をまとめて帰国したばかりの加藤友三郎が就任しました。加藤内閣最大の課題は軍縮の実行です。加藤は組閣最初の閣議で、軍縮については次の議会を待つことなく、準備が出来次第実施に移すという方針を決めたのです。陸軍にとつては「待ったなし」でした。

そこで陸軍が考えたのが、当時二十一あつた師団の数はそのままにして、兵隊の数を間引きすることです。一連隊は三個大隊、各大隊は四個中隊の編成でしたが、これを三個中隊編成にして全部で二百二十中隊減らし、将校二千百人など五万九千人を整理したのです。いざ戦争になつた時、作戦の基礎となる師団の数がえ減らさないでおけば、兵舎などの施設がありますから、動員した兵隊を教育することが出来ます。二十一の師団を二倍の四十二個師団にするのも、比較的簡単だと云うわけです。大正十一年八月十五日から実施され、山梨陸軍大臣の時に行われたので「山梨軍縮」と云います。

陸軍は「この兵力削減は五個師団分に相当する」と説明しましたが、議会には「手緩い、不徹底だ」と大きな不満が残りました。と云いますのは、陸軍の経常費は三千百万円減りましたが、機関銃など兵器の増強費を引くと、正味は二千三百万円です。議会の要求した四千万円にはとても及びません。しかも海軍が前年に比べて二二・七%も減らしたのに、陸軍はたったの六・五%だと云うのです。

それから三年後の大正十四年、「宇垣軍縮」と云われる第二次軍縮をやることになる宇垣一成は、この「山梨軍縮」をどう見たのでしょうか。宇垣は日記に、八月十五日を「軍人生活での第一の不快な日、第一の悲しむべき日、第一の憾むべき日」と書いています。宇垣は時勢とはいえ、軍縮には大反対でした。そしてこんなことになつたのは、「下手な舵取りだったからだ」と、山梨をこき下ろしています。山梨は神奈川県出身ですが、長州閥のホープとして出世街道を歩んでいた田中義一大将と士官学校の同期生です。田中にべつたりくつついて、田中が大臣の時に陸軍次官となり、その引き立てで大臣になつた人でした。宇垣に云わせると「長い物に巻かれるの、権勢に媚びる利己主義者」。軍縮をやれと云われて、ただそれに従つて兵力削減の帳面を合わせただけだ。「山梨軍縮」は軍縮そのものであつて、一番かんじんな、第一次世界大戦の経験を生かした陸軍の近代化、整理・充実には、何の役にも立っていないと云うのです。

世界大戦は、それまでの戦争の観念を根底から引つ繰り返してしまいました。

飛行機、戦車、毒ガスと新兵器が続々と登場しましたが、何といつても大砲と機関銃です。「砲兵は耕し、歩兵は収穫する」と云う言葉まで生まれたほどです。大砲の集中砲撃で、まず敵の陣地を制圧してしまう。日露戦争の時のように、小隊長が先頭に立って軍刀を振るい、「俺についてこい」といった銃剣突撃、白兵戦はもう通用しなくなっていました。「散兵線の花と散れ」という軍歌がありました。散兵線といって小銃を横一線に並べ、一斉射撃のあと銃剣突撃で血路を開く。これが日本陸軍の伝統的な戦法でしたが、これでは大砲と機関銃の餌食になるだけです。とにかく機関銃をバリバリ撃つたら、すぐ突撃分隊に突撃させる。機関銃を中心とした小人数の戦闘に、指揮も戦法もすっかり変わってしまったのです。

ところが外国の歩兵大隊は、少なくとも四丁の重機関銃、十二丁の軽機関銃を持っていて、日本の歩兵部隊には機関銃が一丁もありません。まして歩兵砲や戦車といった、近代兵器のあろうはずがありません。飛行機にしても偵察機だけ、敵を攻撃する戦闘機や爆撃機は一機もないのです。ドイツやイギリスでは都市爆撃が行われ、前線も銃後もない総力戦になっている時です。ヨーロッパの血みどろの近代戦をじかに経験しなかった日本陸軍は、二流どころか三流、四流の旧式装備のまま取り残されてしまったのです。

近代化というのは、陸軍を動力化、機械化してスピードアップを図る。機動性を持たせることです。今まで人や馬で引いていた大砲を車で引く。自走砲とって、大砲自体を走らせる。この大戦で初めて登場した戦車は、その代表的なものでしょう。ところがお金のかかることばかりです。三十機から四十機の飛行機連隊を作るとなると、維持費だけで一個師団分くらいの経費が軽く飛んでしまいます。しかも当時の日本の工業力、生産力は貧弱で、限られた予算での装備改善は容易なことではありませんでした。山梨軍縮というのは、とりあえずは兵力削減を優先させて、世論の風当たりをかわそうとしたため、近代化の点では宇垣の云う通り、極めて不十分なものになってしまったのです。

軍縮と共に「軍人失意の時代」が始まっていました。電車の中で将校が労働者風の男に、「やれ、拍車をとれ、マントを脱げ」とからまれます。拍車というのは乗馬用の靴の金具のことですが、それが邪魔だ、長い将校マントが邪魔だと云うのです。あげくは「税金泥棒」と罵られます。日露戦争の時代には、軍服姿で街中を歩けば誰もが畏敬の念で見てくれたのに、陸軍省、海軍省勤務の将校が帰宅する時には背広に着替えました。軍服姿で電車に乗るには、肩身の狭い思いをするようになったのです。「自分たちは国の誇り」と自負してきたのに、軍縮でクビが心配になってきました。クビになれば地方人、軍隊では一般社会人を地方人と云って一段下に見ていましたが、職を求めて地方人に頭を下げなければなりません。

満州駐屯のある師団長は、参謀総長の上原勇作元帥にこんな手紙を出して、嘆

いています。「軍縮が叫ばれてから、将校の士気が大いに阻喪した。最近の青年将校の配偶者の家柄を見ても、昔と比べて大いに低下している」。「軍人お断わり」の時代になっていました。日露戦争に勝って、軍人が威張り散らした反動でもありました。「もう東洋には戦争はない。戦争がなければ手柄も立てられず、立身出世の機会もない」と、秀才が士官学校や兵学校には入らない時代になっていたのです。その頃の中外商業新聞、今の日本経済新聞ですが、女性が結婚相手として「どんな職業でもよいが、軍人だけはお断わり」と云っている。こんな記事が出ています。

そこへ大正十二年九月一日、関東大震災が襲いました。死者、行方不明十萬五千、被災者は三百四十万人。東京、横浜は壊滅状態でした。損害は四十五億円を突破し、当時の国民総生産の三〇％に当たる被害だったと云います。当然のことながら首都復興、経済復興最優先です。緊縮財政の中で、どうやって復興の財源を確保するか。一段と軍縮を求める声が強まるのが予想されました。

そんな中で陸軍大臣になった宇垣は、二十一個師団のうち一挙に四個師団を廃止する「宇垣軍縮」をやったのです。大正十四年五月、憲政会の加藤高明内閣の時ですが、宇垣が「政界の惑星」と騒がれ、このあと何度か首相候補として担がれるようになるのも、この厳しい環境の中で軍縮を実行した手腕でした。「宇垣は出来る」、「宇垣なら陸軍を抑えられる」。重臣をはじめ国民も、大きな期待感を持っていました。震災で軍隊を見直す空気も出ていました。災害で活躍する自衛隊と同じです。交通機関がマヒし混乱と不安が増大する中で、陸軍は復旧の先頭に立ち、備蓄食糧を緊急放出しました。国民には陸軍が大いに頼もしく見えたのです。

実は「宇垣軍縮」と云うのは、軍隊が新たな信頼を獲得した、この機会を巧みにとらえて、先手を打ったものだったのです。「羊頭狗肉」という言葉があります。羊の頭を看板に掲げて、いかにも羊の肉を売っているように見せ掛け、実際は犬の肉を売っている。見かけと実際が違うことを云いますが、宇垣軍縮がまさにそうでした。羊の頭は四個師団です。日露戦争の後で作られた高田の第十三師団、豊橋の第十五師団、岡山の第十七師団、久留米の第十八師団と、四つも廃止したので、インパクトは強烈でした。誰もが軍縮だと受け取りましたし、加藤高明内閣もまたそう宣伝しました。

ところが、師団を減らさなかった山梨軍縮は五万九千四百人を整理したのに、宇垣軍縮の方は三万三千九百人です。兵隊の数だけ見れば、宇垣軍縮の方がずっと少ないのです。陸軍予算に至っては、大正十五年度こそ一億九千七百万円と、前年度より千八百万円減りましたが、昭和二年度は二億一千八百万円。二千万円も増えているのです。宇垣軍縮が軍事費の節減とは、全く関係のないものであったことが分かります。軍縮で浮いた六千万円は、全て陸軍の近代化に当てられ

たのです。歩兵、砲兵などと並んで初めて航空兵と云う兵科が作られ、飛行機二個大隊が増設されました。戦車隊も一個中隊出来ましたし、歩兵には軽機関銃、歩兵砲が装備されました。宇垣軍縮は「軍縮」の羊頭を掲げ、その実「近代化」という狗肉を売るものだったのです。

宇垣は慶応四年、王政復古の年に岡山県の農家の五男坊として生まれました。生後三か月で父親が赤痢で亡くなりましたから、母親の手一つで苦労して育ったのです。十二歳で小学校を卒業すると母校の代用教員となり、十六歳で教員検定試験に合格し、小学校の校長になっています。十六歳の校長先生なんて今では考えられないことですが、その宇垣が陸軍に入ることになったのは、生徒を引率して陸軍の演習を見学した時、軍人に憧れるようになったと云うのです。宇垣家は戦国時代、一万三千石ほどを領した一城の主だったと云われ、陸軍に入って偉くなるうと青雲の志を抱いたようです。反対する母親を説得して士官学校に入り、フランス式からドイツ式に代わった新制度の陸士第一期生になります。

しかし士官学校での評価は「ずぼらで無頓着」、剛毅不屈の性格も災いして一向にうだつが上がらず、あだ名が「鈍垣」。鈍い、鈍重という意味ですが、最古参の中尉としてやっと陸軍大学校に入りましたが、ここからメキメキ頭角を表現していったようです。卒業成績も三番で恩賜の軍刀を貰っていますが、二十八歳で結婚する時、「精神一到何事か成らざらん」の決意を示すため、奎次と云うちょっとやぼったい名前を一成に改めたのだそうです。しかし「日本一になるのを目指したのだ」。こう云われるくらい、若いころから野心に燃えた軍人でした。田中義一に可愛がられ、陸軍の出世街道を歩みましたが、大変な自信家でもありません。大正十三年一月、清浦奎吾内閣の時に初めて陸軍大臣になったのですが、元日の日記に「帝国の運命盛衰は繋りて吾一身にある」。まるで一国の宰相のような決意を書いています。軍縮についても、「自分のほかにこの大事業をやる者はいない」と自信満々でした。

実は宇垣は前年の九月、再び陸軍大臣に返り咲いた田中によって次官に抜擢され、陸軍近代化をどう進めるか、そのプラン作りを任されていたのです。出した結論はこうでした。「陸軍の根本的改革には莫大な金がかかる。しかし戦後不況と震災復興優先の状況を考えれば、軍備改革にこれ以上の財政的支出を求めなければいけない。したがって改革に要する費用は、全て部内から捻出しなければならぬ」。こうして近代化経費捻出のために考え出したのが、四個師団廃止の方針だったのです。

ところが宇垣が、このプランを陸軍の最高審議機関である軍事参議官会議にかけると、上原勇作元帥から猛烈な反対が出ました。「政党や世論に迎合し、陸軍を破壊するものだ」と云うのです。上原の反対は軍事的な観点というよりは、上原と田中、さらには田中につながる宇垣との派閥争い、感情的な反感から出たも

のでした。賛成反対は四対四。宇垣は議長の奥保鞏元帥に迫って多数決とさせ、議長賛成の一票で辛うじて押し切ったのです。宇垣はこの軍縮を「国防力を高めるための軍備の再編成だ」と自画自賛しています。確かに軍事的に見たら、宇垣の近代化の方向は決して間違っていない。いくら師団の数を増やしても、旧式装備のままでは張り子の虎なのです。しかし太平洋戦争を振り返って見る時、所詮は宇垣軍縮も山梨軍縮と五十歩百歩。近代化という点では、ほんのちよつぴり前進しただけでした。質的にも量的にも、とても宇垣が自慢するようなものはなかったのです。

よく「太平洋戦争を日露戦争で戦った」と云います。武器、兵器の話ですが、昭和十二年に支那事変が始まった時、日本陸軍の小銃は三八式歩兵銃でした。外国では自動小銃が常識になってきているのに、日露戦争当時の明治三十八年に採用された、一発ずつ撃つ小銃のままだったのです。工業力が貧弱なこともありましたが、自動小銃にして弾丸の無駄遣いをするより、よく訓練して一発必中で十分だと云うのです。これは堀毛一磨と云う陸軍少将が話しているのですが、昭和五年から二年間ソ連に駐在した時、ソ連軍はもう戦車と重砲、さらに低空攻撃の飛行機をセットにした立体作戦の訓練をやっていたそうです。堀毛は戦車に対しては戦車、飛行機に対しては飛行機、ことに戦車が集団でやってくる場合には、こつちも非常に多くの飛行機で対抗しなければダメだ。こう云う意見書を出しましたが、見向きもされなかったと云います。理屈ではわかっていても、そんなお金がありません。結局は、質も量も足りない分を「肉弾を以て砲弾に代える」。日本陸軍は体当たり、玉砕精神重視になってしまったのです。

宇垣軍縮の時、「師団を半分くらいに減らしてしまう。陸軍を思い切ってコンパクトなものにして、浮いた経費を産業育成に当て、世界に遅れない最新装備を考えるべきだった」。こう云うのは、敗戦後、最後の陸軍大臣として陸軍の幕引き役を務めた下村定大将です。せめて現実認識を大切にし、合理的な物の見方を育てる。こう云う教育をしていたら、その後の陸軍も日本も、ずい分変わっていたのではないのでしょうか。

ところでこの宇垣軍縮を、当時の陸軍部内はどう見たのでしょうか。少しでもヨーロッパの軍事情勢に通じた軍人なら、新式装備は急務であり、そのための軍縮は当然だと思っていました。しかし第一次大戦をその目で見た軍人は、外国駐在武官や、観戦武官としてヨーロッパ戦線に派遣された将校など、ほんの一握りしかいないのです。大部分は軍人勅諭で「兵力の消長は国運の盛衰」、つまり軍隊が多いか少ないかは、そのまま国家の盛衰につながると教えられてきました。それが四個師団も減ったのですから、ショックは強烈でした。しかも朝晩親しんできた連隊旗、伝統と団結を誇りとしてきた師団や連隊がなくなってしまうのです。

山梨軍縮ではクビになった者だけが恨みましたが、宇垣軍縮は陸軍に残った者にも大きな恨みを残しました。これから昇進して、獲得するポストが激減してしまつたのです。師団には歩兵四個連隊のほかに、騎兵や工兵、砲兵などの連隊がありますから、連隊長のイスだけでも四十近く減つてしまいました。大将、中將になるのは無理だとしても、せめて連隊長になるのが夢だったので、宇垣軍縮はその夢を奪つたのです。同じように軍縮をやつたのに、山梨軍縮がそれほど恨まれず、宇垣が陸軍部内で後々まで深く恨まれる根本原因は、ここに潜んでいます。昭和十二年に一度は組閣の本命を受けた宇垣が、身内の陸軍に反対されて、組閣断念に追い込まれる。その一因ともなつたのです。

私が昭和十八年に中学校に入った時、小学校と何が一番違つたかと云えば、軍事教練があつたことです。私なんかも相当な軍国少年でしたから、全てが挙手敬礼式になつて、何となく大人になつたような気分がしたものでした。実はこの学校教練は、宇垣軍縮と共に始まつたものなのです。そして宇垣軍縮最大の特徴だつたと云つてもいいでしょう。宇垣は軍縮がスタートした時、「今になつて自白するが」と、こう書いています。「今回の軍備整理は、国民世論の先手を打つて軍縮を断行し、併せて国防の改善を図り、軍民一致融和して挙國国防の端緒を開く。この三点を狙つたものである」。関東大震災で「もつと軍隊を減らせ」という声が高まる前に、軍縮をやつてしまふ。軍事教練をやつて国民の国防意識を改善し、国家総動員体制を作る。それも陸軍主導でやる。陸軍独裁を狙つた、極めて政治色の強いものだったので。

それにしても、大正デモクラシー花盛りの時代です。学校教練といつた軍国主義的なことを、軍縮という一見平和路線に結びつける。それも四個師団廃止という形―見た目の大きさで、「陸軍はよくやつた」と一般社会の抵抗をそらせたあたり、宇垣という人は、やはり大変巧妙な政治手腕の持ち主だつたと云つていいでしょう。

宇垣は軍縮に先立つて、まず大正十四年四月、「陸軍現役將校配属令」というものを作りました。これによつて、男子の中学校以上に二千人の現役將校を配属したのですが、軍縮で余る將校の失業対策でした。私が中学に入った時の軍事教官も、この宇垣軍縮でクビになつた少佐と大尉でした。思ったほど規則一点張りではなく、暑い時の教練など、すぐ「疲れたらう。少し休め」と云つて、木陰で休憩をとらせてくれたものです。ところが翌年、士官学校出、バリバリの現役の若い中尉がやつてくると、もういけません。精神主義の塊で、訓練、訓練に一変してしまいました。三八式歩兵銃というのは大変重たい、中学生の肩にはずしりと重さがこたえる鉄砲で、うっかり落とすものなら大変です。「菊のご紋章がついているのに何事だ」と、軍刀で殴るのです。少佐、大尉の教官は階級では上なのに、予備役では現役には頭が上がらないのか、この中尉に小さくなつていまし

た。軍刀で殴られた私の同級生は、本当は海兵志望だったのに、「あいつを見返すには、陸軍に入つてあいつより偉くなるしかない」と云つて幼年学校に入りましたが、半年も経たないうちに終戦になってしまいました。

実はこの配属将校制度は、失業対策以上に、いざ戦争になった時に大隊長、中隊長として先頭に立つ要員、一番大切な少佐、大尉クラスの中堅幹部を定員外で温存する狙いがあったのです。それも陸軍の予算ではなく、文部省の予算によつてですから、うまいことを考えたものです。こうして中学、高等専門学校では軍事教練が必修科目になり、一週に二、三時間、各個教練とか部隊教練のほか射撃も教えるようになりました。もつとも必修科目といつても、教練の検定に不合格になったからといって、学校を卒業出来なかつたわけではありません。しかも任意科目だつた大学生までが、この教練に励んだのは何故だつたのでしょうか。それは徴兵制度の重圧が、若者たちの心に大きくのしかかつていたからなのです。教練の検定に合格すれば、兵役上の恩典が与えられました。学生にとっては鞭でしごかれても、このアメが大きかつたのです。

徴兵制度。戦後五十八年も戦争がなく平和が続いていると、それが戦前の青年にとつてどんなに大変なものだつたか、今の若い人たちにはとても想像出来ないでしょう。徴兵令は明治六年に制定されましたが、明治憲法に「日本臣民は兵役の義務を有す」とあるように、戦前は国民が守らなければならぬ最大の義務でした。拒否すれば懲役三年以下の罪です。男なら誰でも満二十歳になれば、徴兵検査といつて体格検査を受けなければなりません。体格や体位の優れた者から甲種、第一乙種、第二乙種と分けられ、ここまでが現役徴集される合格者です。丙種は近眼など、現役には向かないものの、国民兵役といつて、いざという時には召集される者。そして兵役に適さない丁種不合格となつていました。

海軍は志願制でしたから、陸軍を中心に話しますと、現役として徴集されれば二年間の兵営生活を送ることになります。しかも除隊になつても、それで終わりと云うわけではないのです。戦争が始まれば、すぐ動員される予備役が五年四か月、後方警備などに当たる後備役が十年と、兵役義務は延々と続きます。予備役の間も、一年おきの点呼に出ていかなければなりませんし、年間三十五日の演習召集もありました。働き盛りの男性には、大変な重荷だつたのです。

ただ「国民皆兵」と云つても、それは建て前であつて、実際は運不運でした。徴兵検査に合格したからといって、必ず現役徴集されたわけではないのです。平和な時には、そんなに兵隊は要りません。まして軍縮の時代です。検査の合格者の中から必要な数だけ、籤引きで選んだのです。合格者の七割は入営しないで済んだと云いますから、二年間現役で縛られるのと、そうでないのでは大違ひでした。上級学校進学率が低かつた戦前のことです。二十歳といえば、もう一人前の働き手。しかも社会保障制度が整つていない時代ですから、兵隊にとられれば

解雇され、収入も職そのものも失ってしまいます。「甲種合格を赤飯で祝った」というのは表向きのこと、その陰では「何とか徴兵を逃れたい」。神社やお寺へのお百度参りや神頼みも盛んでしたし、徴兵検査で何とか丙種になるよう、お醤油を飲んで腎臓病に見せ掛ける。こんな涙ぐましい努力もありました。

宇垣軍縮は、いわばそうした「運不運」の兵役制度に、教練の検定に合格していれば確実に貰える特権、特典を盛り込んだのです。昭和二年四月、徴兵令に代わって新たに兵役法を制定しましたが、中学以上の在学者は二十七歳まで徴兵検査が延期されました。学生優遇の措置ですが、卒業して半年以内に次の学校に入る事が条件ですから、徴兵逃れの受験浪人はダメです。さらに教練合格者には現役二年を半年短くして、一年半としたのです。しかも入営中の費用を自分で払えば、幹部候補生を志願出来ました。幹部候補生になれば現役は一年、高等専門学校以上の学歴があれば十か月で除隊し、予備役少尉として将校になれます。二年が十か月ですむのですから、教練が必修でなかった大学生までが、何とかこの特典に与ろうと教練を受けたわけです。

先生を養成する師範学校の場合だと、短期現役兵といって七か月、教練合格者は五か月で除隊です。軍隊経験のある先生をどんどん小学校に送り込み、小学生のうちから軍事教育を普及させようというわけです。学生たちが比較的すんなり学校教練を受け入れた背景には、こうした目に見える特典が大きかったです。一方の陸軍には、初級幹部養成の狙いがありました。日露戦争の時に、突撃の先頭に立った小隊長クラスが次々と戦死し、その補充に苦しんだ苦い経験があります。ふだんから幹部候補生として小隊長要員を養成しておけば、陸軍にとっても一石二鳥だったのです。

宇垣軍縮のもう一つの大きな特徴は、大正十五年四月、小学校を卒業しただけの勤労青少年のために、青年訓練所を作ったことです。市町村のほか、大きな工場や鉱山、商店などでも、文部省の許可で設立出来ました。対象は十六歳から二十歳まで、期間四年の定時制です。ところがその訓練内容となると、半分は軍事教練なのです。修身公民百時間、普通の学科二百時間、職業課程が百時間に対して、軍事教練には四百時間もとっています。ここでも教練検定に合格すれば、現役を半年短縮出来ました。

このように宇垣軍縮と云うのは、軍隊は減らした代わりに、軍隊の外で学校教練、青年訓練を組織化し、文字通り「国民皆兵」を実現したものでしたのです。宇垣は山梨軍縮が行われた時、大正十一年七月の日記にこう書いています。「まず国民の国防精神を高揚し、国防実力の充実を図らねばならぬ。即ち国民の協同一致の精神、国家皆兵の精神、国家総動員の精神の実現を図らねばならぬ。軍備の縮小さるるだけ、その反対にこの精神は高潮せねばならぬ」。宇垣軍縮の一番の真意は、国防精神、国家総動員精神の点にあつたのです。

云つてみれば宇垣軍縮は、日本を「兵営国家」にしてしまうことでした。教練の特典によつて、現役兵の訓練期間は確かに四分の一から半分、小学校の先生ならたった五か月に減りました。しかしその分、徴兵検査合格者の徴集回転もよくなりましたのです。以前のように合格者の三割程度しか入営しなかつたのと違つて、軍隊教育を受けた者を次々と社会に送り出す結果になりました。いざ戦争になった時、すぐ使える予備軍は急速に増えましたし、戦時動員力を画期的に高めることにもなつたのです。

宇垣はさらに、除隊者の組織である在郷軍人会にも補助金を出して、組織強化の手を打っています。青年訓練所で教練を担当したのは、この在郷軍人会でしたし、昭和の初めには会員三百万人を擁する大圧力団体になりました。軍国思想普及の先兵となり、新聞や雑誌がちよつとでも陸軍の批判をすれば、それこそすぐ乗り込んできて不買運動を展開したのです。

それにしても、大正デモクラシー花盛りの時代です。一般国民がこの軍縮を歓迎したのは、やはり「四個師団廃止」という大きなゼスチャーにたまされ、宇垣の真意までは見抜けなかつたと云うことでしょう。大正末の新風俗、モダン・ガール、モダン・ボーイの「モガ、モボの時代」、「何となくふわふわした時代」に危機感を感じていた国民もいました。

関東大震災による社会の激変もありました。震災は東京の江戸文化を破壊しただけではなく、それまでの社会風俗にも大きな変化をもたらしたのです。サラリーマンは新しい住まいを郊外に求め、私鉄のターミナルにはビルが作られ、ショッピング・センターとなつていきました。「文化的アパートメント」を謳い文句にした代官山や青山のアパートは、行列が出来るほどの人気だったそうです。文化的な生活、ヨーロッパ風のモダンな世界への憧れが強くなつていきました。美容師に看護婦さん、バス・ガールに電話交換手と、職業婦人の進出もめざましかったですし、若い女性の外出着は洋装姿になりました。彼女たちの心を強く引き付けたのが、竹久夢二の描くなで肩の痩せた女性であり、銀座資生堂の化粧品だったのです。銀座もカフェー全盛時代です。

ですから「若者のゆるんだタガを引き締めるには、軍隊教育は絶好だ」。こんな軍事教練を評価する声も、結構強かつたのです。そして軍縮を求める世論を利用して、先手を打つて国家総動員体制を作つてしまふ。それも文部省など、よその予算を使つてです。しかも現役の期間短縮というエサを播いて、学生の教練に対する反感をかわしたあたり、宇垣と云う人はやはり大変な政治手腕の持ち主であり、やり手だつたと云えるのでしよう。

×

×

日本の陸軍というのは、長州出身の山県有朋が作ったようなものなのです。徴兵令を制定し、参謀本部や軍人勅諭を作つたのも山県ですし、「陸海軍大臣現役

武官制」、陸海軍大臣は現役の大將、中將に限るという規定を作ったのも山県です。山県の意に反しては何も出来ないというほど、陸軍の大御所として君臨しました。陸軍大臣一つをとってみても、明治三十一年から四十四年まで実に十三年間、桂太郎、児玉源太郎、寺内正毅と長州で独占したのです。藩閥と云うのは「身びいき」と同じことですから、陸軍省や参謀本部の重要なポストも、当然のことながらほとんどが長州、あるいはその系列で占められました。

陸軍では「長州でなければ人でない」と云われましたし、反発も強かったわけです。広島陸軍幼年学校に入ったら、一クラス五十人のうち三十人までが長州で、びつくりしたという話があります。山口県では成績の良い小学生がいると、町の素封家がお金を出して幼年学校に入れたのだそうです。幕末に下関の廻船問屋白石正一郎が、高杉晋作の作った奇兵隊に私財を投じ、自らも隊員として参加した話は有名ですが、これが長州の風土なのでしょう。長州全盛の陸軍は、郷土も一体となって育てたことになりました。

山県が健在なうちは、山県に睨まれたらおしまいですから、良くも悪くも陸軍の統制は取れていました。原敬は、満州や移民摩擦をめぐってアメリカとの間が険悪になった時でも、「大丈夫だ。陸軍の若手がどんなに騒いでも、山県の爺さんの目の黒いうちは、日米戦争は起こりっこない」と云っていたほどです。山県と云う人は一見「軍国主義の権化」のように見られがちですが、その実外交には非常に慎重な人でした。奇兵隊時代にイギリス、アメリカなど四国連合艦隊と戦って、敗れた苦い思いを生涯持ち続けました。対米関係を大切にし、中国に対しても「武力を頼んで威圧する」といったやり方には反対でした。ところが山県が八十三歳で亡くなったとたん、陸軍部内の派閥抗争に火がついたのです。山県という重石がとれて、長年の長州全盛、長州横暴に対する忿懣が一気に噴き出してきたのです。

まず大正十三年一月、清浦奎吾内閣の陸軍大臣になった宇垣一成の大臣人事をめぐって、陸軍中枢を真つ二つに割る派閥抗争が表面化しました。第二次山本権兵衛内閣が虎ノ門事件、摂政宮だった昭和天皇が無政府主義者の難波大助に狙撃された事件で総辞職し、後継首相の清浦は陸軍大臣の田中義一に留任を求めました。ところが田中は辞退し、次官になったばかりの宇垣を推薦したのです。政界入りを考えていた田中は、長年目をかけてきた宇垣を大臣にして、陸軍部内に影響力を残しておきたかったかっただけでしょう。それに震災直後です。軍縮を求め声が一段と強まる中で、懸案の陸軍近代化をどう進めるか。田中は宇垣にこの問題を研究させていましたから、宇垣なら出来るだろうと期待もあったと思いません。また組織をいじれば、たとえ上手くやったにしても非難攻撃の的になり兼ねません。損な役回りを宇垣に押し付けると云った、そんな魂胆もあったのでしよう。

しかし宮崎県都城出身の上原勇作元帥にとつて、内閣総辞職は長州から陸軍の実権を奪う絶好のチャンスでした。さっそく清浦に、長崎出身で上原派の福田雅太郎大将を大臣にするよう申し入れたのです。これを聞いた田中は、陸軍の三長官会議を持ち出して反撃に転じました。「陸軍大臣の人事は、大臣、参謀総長、教育総監の三人の長官一致の推薦を必要とする」と云うのです。参謀総長も教育総監も、田中と同じ長州派です。「三長官の協議で宇垣に一致した」という田中に、清浦も困りました。上原に色良い返事をしたばかりだったからです。そこで田中に、「上原と相談して三人の候補者を推薦してほしい」。その中から清浦が選ぶと云うのですが、田中と云う人は、こういうことにかけては大変な策士でした。

田中は大臣候補として、第一に福田、第二に福岡出身で、やはり上原派の尾野実信大将、そして第三に宇垣の名前を書いて、上原の元に届けたのです。上原もこの順番なら、云うことはありません。それでも念のためと思ったのでしょうか。「第三の者、つまり宇垣のことですが、こうした年少者は今後の政局を顧みて任用しない方がよい」。こういう但し書きをつけて、田中に返しました。田中は上原との協議で決めたとして、三人の候補者名簿を清浦に出しましたが、実は一番手に挙げた福田をはずす、絶好の材料を用意していたのです。「甘粕事件」です。

関東大震災が発生すると、政府は首都東京に戒厳令を敷きましたが、麹町憲兵分隊長だった甘粕正彦大尉が、無政府主義者の大杉栄、内妻の伊藤野枝と六歳になる甥を憲兵隊に連行し、虐殺した事件です。新聞は震災と云う混乱に便乗した虐殺であり、とりわけいたいけな子供を無差別に殺したことに、「陸軍の大汚辱だ」と非難しました。しかし陸軍は、甘粕大尉の個人的な犯行として処理し、戒厳司令官だった福田大将に責任を取らせる形で、司令官を更迭しただけでした。ところが田中は、これを逆に利用したのです。「そんな福田を大臣にすれば、議會から攻撃されるのは必至だ。だから宇垣中将にしてほしい」と云うのです。清浦のバックは貴族院ですから、衆議院と余計な波風は立てたくありません。それでも清浦が、「第一位をとらないのなら、第二位の尾野大将が順当ではないか」と云うと、田中は「尾野には就任の意思がない。組閣が切迫しているいま、時間の無駄だ」と、強引に宇垣の起用を迫ったのです。尾野は最初から当て馬でした。そして上原がつけた但し書き、「宇垣排除」については、田中は一言も触れなかったのです。

実は上原、田中、宇垣の三人は、これまで陸軍の重要な政策、方針には、スクラムを組んで当たってきた仲でした。大正政変の幕を開いたのも、この三人なのです。明治天皇が亡くなり元号が大正に改まると、陸軍は強硬に二個師団増設を要求しました。ロシアの復讐戦に備えるためどうしても必要だと云うのですが、日本は日露戦争で外国から莫大な借金をしています。政友会の西園寺公望内閣が

財政上とても無理だと拒否すると、陸軍大臣だった上原が単独辞職して内閣を倒したのです。この筋書きを書いて上原に実行させたのは、軍務局長の田中であり、軍事課長の宇垣でした。世論からは「陸軍横暴」とさんざん叩かれた上原ですが、陸軍部内では逆に「よくやった」と男を上げました。そしてこの上原の下に、長州閥に反発を感じていた軍人たちを結集させる結果になったのです。

シベリア出兵を強行したのも、参謀総長が上原、次長が田中、作戦部長が宇垣と云うトリオです。ところが、そのシベリアからの撤兵をめぐって、上原と田中の間に亀裂が生まれました。参謀次長時代、出兵の強硬論者だった田中が原敬内閣の陸軍大臣に就任すると、それこそ手の平を返したように兵力削減、撤兵論に転じたからです。この百八十度転換の変わり身の早さは、親分として仕えてきた山県の力の衰えを見て、もう政党内閣の時代が来ている。先も見え、やがては政界出馬を考えていた田中が、原に擦り寄った結果なのでしょう。ところが参謀本部は、まだまだ兵力増強、出兵拡大を考えている時です。田中は参謀総長の上原と再三衝突することになり、この対立が山県の死と共に長州対反長州の対立、さらには宇垣・上原の対立となっていきました。上原が宇垣軍縮に執拗に反対したのも、ここから始まっているのです。

田中の強引なやり方で、清浦内閣の陸軍大臣になった宇垣ですが、およそこの人くらい唯我独尊、人に感謝するといった気持ちのない人も珍しいのです。宇垣の陸軍での出世は、田中の引き立てなしにはなかったでしょう。ところが宇垣は「全ては自分の実力である」。田中についても、「上原一派の侵入を阻止するために、自分を利用して軍部での地位を守ろうとしたのだ」。宇垣は日記に「利己本位で思ったより小さい男だ」と、田中を突き放すようなことを書いています。こうした情誼に欠ける点は、宇垣の大きな人間的欠陥だったのではないでしょうか。昭和十二年一月、宇垣に組閣の本命が下り首相のチャンスが回ってきた時、宇垣はそれまで目をかけた人たちからソツポを向かれました。陸軍大臣就任を断られたのです。五代の内閣で陸軍大臣を務め、「宇垣時代」「宇垣軍閥」を築いた宇垣が、いわば身内の陸軍によって反対され、陸軍大臣を得られずに首相になれなかったのも、こうした宇垣自身の性格に一因があったように思います。

ところで大正十三年一月、貴族院をバックにスタートした清浦内閣は、宇垣が日記に「こんな時代錯誤の内閣、短命を予想される内閣で大臣になるのは迷惑至極。犠牲的精神でなったのだ」。こう書くくらい、発足早々「第一次護憲運動」という、倒閣運動の大波に揺さぶられることになったのです。もともと「時代錯誤」と云ったのは清浦本人です。首相候補に清浦の名前が下馬評に上がると、清浦は「自分はもう七十五歳だ。そんな老人が内閣を組織するのは時代錯誤だ。自分はそれほど耄碌していない」。こう云っていたのに、翌日組閣の本命を受けると、「勅命とあらば最善の努力をする」と、あっさり態度を変えてしまいました。

この人は山県直系の官僚出身ですが、第一次山本権兵衛内閣がシーメンス事件で倒れた時も、一度は清浦内閣が出来かかったことがあります。結局お流れになって、鰻の匂いを嗅いだだけで食べ損ねた内閣、「鰻香内閣」という有り難くない名前を日本の政治史に残しました。今度も貴族院中心、政党から大臣が一人も入っていない内閣に、政党や言論界は「特権内閣だ」と反発したのです。普通は内閣が親任式をすませると、街には閣僚の顔触れを書いた「号外、号外」の鈴の音が鳴ったものでした。ところがこの内閣に、号外を出した新聞社は一社もありませんでした。最初から期待外れの内閣だったのです。

それにしても、政党政治を理想としていた元老の西園寺公望が、何で首相に清浦を推薦したのでしょうか。一つは衆議院議員の任期が五月に切れ、西園寺ほどの政党にも属さない清浦の手で、公平な選挙をやらせたかったこと。もう一つ、皇太子裕仁親王と久邇宮良子女王のご成婚式が一月二十六日に迫っていました。この祝典を政争などで混乱しないよう、平穩に行いたいと考えたからです。ところが西園寺の考えは、全く裏目に出してしまいました。憲政会、政友会、革新俱樂部は護憲三派連合を結成し、「清浦内閣打倒」の火の手を挙げたのです。

清浦という人は、政治評論家の馬場恒吾、戦後読売新聞社長、日本新聞協会の初代会長になった人ですが、馬場が「喜劇の人」云ったように漫画の主人公のような人物でした。おおよそ一国の首相ともあろう者が、予算の編成どころか衆議院の本会議で一番大切な施政方針演説も出来ない。議会の速記録に、「只今只今」という、たった四文字を残しただけで退陣する。こんなことは議会上の珍事だと云つていいでしょう。東海道線で列車妨害事件があり、この列車に護憲三派の代議士二十数人が乗っていたことから、本会議で追及されました。答弁に立った清浦が「只今只今」と云ったところで、暴漢二人が議場に乱入し、大混乱となって議会は解散し、総選挙となったのです。

結果は護憲三派連合の大勝利でしたが、政友会総裁高橋是清の態度に、この第二次護憲運動に賭けた決意のほどがうかがえます。政友会は清浦内閣打倒か擁護かで二つに割れていましたが、高橋は代議士会で「大局より見て、いかにするもこれを擁護することは出来ない」。こう演説すると、男爵になっていた華族の地位を捨てて総選挙に出馬し、衆議院に議席を持つ積もりだと云う、断固たる決意を表明したのです。江戸生まれの高橋は、政友会総裁だった原敬の遺志を継ごうと、原の故郷である盛岡から出馬しました。のちに衆議院議長になった田子一民との一騎打ちになりましたが、政府は何としても高橋を落とそうと懸命です。盛岡出身で他府県の役人になっていた官吏六十人を旅費は官費持ちで帰郷させ、田子に投票させたのです。小選挙区制の時代に六十票の移動は大変大きなものですが、それでも「ダルマさん」の愛称で親しまれた高橋人気もあって、高橋は八百五十九票対八百十票、わずかに四十九票差で辛うじて当選出来たのです。

総選挙が終わると、後継首相についてご下問を受けた元老の西園寺は、即座に議會第一党になった憲政会總裁の「加藤高明然るべき」と即答しました。これは異例なこと、普通なら「いずれ考慮のうえ、奉答仕るべき」と答えて、その後元老や内大臣で協議して初めて後継者を奉答するのが慣例なのだそうです。ところがかねてから「公正な選挙を行なって多数を得た政党に内閣を組織させたい」と考えていた西園寺は、この機会に政党内閣制度の確立に一段と強固な基礎作りをしようとしたのです。

こうして大正十三年六月十一日、加藤高明を首相とする護憲三派連立内閣が成立しましたが、この第二次護憲運動は「政党内閣時代の到来」という、大きな時代転換を果たすことになりました。日本の内閣史上初めて、総選挙に勝利した第一党の党首が政権を担当することになり、これから八年近く、昭和七年の五・一五事件で犬養毅首相が暗殺されるまで、政党内閣制、二大政党時代の扉を開いたのですから、画期的なことでした。しかしその裏では、この加藤内閣に陸軍大臣として留任した宇垣によつて、「宇垣軍縮」の名のもとに「国民皆兵」、「兵營国家日本づくり」が進められたのですから、何とも皮肉なことでした。

加藤高明内閣というのは、功罪両面を併せ持った内閣でした。二十五歳以上の男子なら、誰でも選挙権を持てるようにした普通選挙法。これを実現したのが加藤内閣なら、悪名高い治安維持法を作ったのもこの加藤内閣なのです。国税十円以上納めた者でないと選挙権がなかったのが、その納税制限を取っ払ったので、有権者は一挙に四倍に増えました。それまで有権者と云えば、大地主、高級官僚、高級サラリーマンに限られていました。「氏素性の正しい者が選挙権を持つていたのに、これでは共産主義者、無政府主義者も議會に出てくる」。こういった枢密院や貴族院の反対をかわすため、「危険思想の取り締まりは厳罰で抑える」と、いわば抱き合わせで作られたのが治安維持法だったのです。

読売新聞は「いよいよ張られた治安法の大アミ 何が最初に引つかかる？」と書いています。最後まで反対を叫び続けた代議士の清瀬一郎、東京裁判で東条英機の主任弁護人を務め、衆議院議長になった人ですが、清瀬は「こんな悪法が通つたら、日本はこれまでだ」と云ったそうです。何でもこれで引っ掛けて、思想弾圧、言論弾圧の武器となり、事実のままに清瀬の云う通りになりました。国民の誰もが望んでいた普通選挙法を通すためとはいえ、とんでもない化け物を作ってしまったのです。「暗い時代」の始まりでした。

もう一つ見逃してならないのは、陸軍上層部が派閥抗争にしのぎを削っている間に、新しい勢力、陸軍大学校卒業生による「陸大閥」が生まれたことです。昭和の日本を支配したのは陸軍軍閥ですが、その実体は実は陸大閥なのです。満州事変を起こしたのも、支那事変、太平洋戦争へと戦火を広げていったのも、みんな陸大の出身者でした。陸軍大学校というのは、日本陸軍の最高学府です。士官学

校出の成績優秀者に参謀教育をする学校ですが、ここを出れば「將軍は約束されたのも同然」と云われたエリート集団です。陸軍省や参謀本部の部長、課長といった主要ポストは全員が陸大出でしたし、職務権限を握った者が横に連絡を取り合いスクラムを組んだのですから、陸軍を動かす大きな力を持ったわけです。

この陸大閥の誕生のきっかけは、「バーデン・バーデンの密約」と云われるものです。バーデン・バーデンは南ドイツの温泉保養地ですが、ここに士官学校十六期の「三羽鳥」と云われた、三人の同期生が集まったのです。ワシントン会議が始まる直前、大正十年十月二十七日のことです。十六期は日露戦争が始まった年、明治三十七年の卒業生ですが、永田鉄山、小畑敏四郎、岡村寧次の三人の少佐でした。いずれも「軍刀組」と云って、陸大を優秀な成績で卒業し天皇から恩賜の軍刀を授けられた者ばかりです。永田は軍務局長の時、白昼軍務局長室で皇道派の相沢三郎中佐に惨殺されました。二・二六事件の引き金になった事件ですが、永田はもし殺されていなかったら、間違いなく東条英機に代わって戦時下の首相、陸軍大臣になっていたろうと云われた人です。小畑はやがて永田と対立し、皇道派として陸軍を追われますが、岡村は敗戦の時の支那派遣軍總司令官です。

ロシア公使館付武官になった小畑が革命でロシアに入らず、ベルリンに足止めになっていたところへ、ヨーロッパ出張を命じられた岡村がやってきました。イスには公使館付武官の永田がいる。三人で会おうということになったのです。三人は日本にいた時も、土曜の夜といえば必ず誰かの家に集まって、深夜まで勉強会を開いていた仲でした。大戦後のヨーロッパをその目で見た三人は、戦争が国家のあらゆる資源を動員しての総動員戦争、全体戦争の時代になったことを実感していました。日本もそうした戦争に勝ち抜ける体制を作らなければダメだ。それには陸軍を改革することだ。まず第一に派閥の解消、つまり長州閥体制の打破を申し合わせたのです。そして陸軍の人事を刷新する。自分たちが陸軍省や参謀本部の中心に座ってやろう。ただ十六期だけでは幅が狭いから、ちようどういプチツヒには一期下、十七期の東条英機が留学している。東条も入れようということになって、岡村が翌日東条を訪ね、四人の密約、「同志結集」の約束が出来上がったのです。

長州閥打破は、まず陸軍将校の登龍門である陸大から、長州出身者を締め出すことから始まりました。陸大に入れるのは、一年で大体三、四十人。士官学校卒業生の一割足らずです。陸大を出ると胸に天保銭と云って、天保六年に幕府が発行した細長い楕円形のお金に似た記章をつけました。その記章をつけていない、つまり士官学校しか出ていない将校は「無天組」と云って、一格下に見られていました。この違いがどんなに大きかったか。太平洋戦争で無天組の山崎保代大佐がアツツ島で玉碎した時、士官学校同期で天保銭の富永恭次が陸軍次官、中将だったと云えば、お分かり頂けるでしょう。天保銭組が参謀とか陸軍の主要ポスト

を占めたのに対し、無天組はほとんどが部隊勤務、田舎回り。連隊長になれば良い方で、大抵が大佐、中佐の佐官止まりでした。陸大を出るか出ないかで、陸軍での一生が決まってしまうのです。

帰国した四人は相次いで陸大の教官となり、陸大から長州出身者を徹底的に締め出しました。一次の筆記試験で良い成績を取っていても、それが長州だと二次の教官面接でぐんと悪い点をつけて、落としてしまうのです。長州締め出しがどのくらい徹底していたか。陸大の卒業生名簿が何よりも雄弁に物語っています。大正十一年から昭和八年まで実に十一年間、長州出身者は一人もいません。長州というだけで陸大には入れなかったのです。

東条は後で「長州閥打破にはあれが一番いい方法だった」と云ったそうです。東条にとつては、親の仇を討つような気持ちもあつたようです。お父さんの英教という人は、戦史の研究では第一人者と云われた人ですが、岩手県出身で性格も一本気のため、長州出身の陸軍大臣寺内正毅に嫌われました。朝鮮駐屯の旅团长の時、軍司令官でできたのが長州出身の長谷川好道大将です。夜な夜な花街に溺れ、芸者を官舎に囲ったものですから、憤慨した英教が面と向かつて反省を迫ったのです。ところが反省どころか、かえつて憎まれ、英教は名誉進級で中將になった時に陸軍を追われ、大正二年失意のうちに亡くなりました。青年将校になつていた東条には、「長州憎し」の気持ちが一倍強かつたのでしよう。もともと実際は、日露戦争で旅团长として指揮をとつた時、作戦指揮が消極的でロシア軍撃滅のチャンスを逃した、それが左遷の本当の原因だつたと云われます。

ヨーロッパから帰国した永田たちは、十五期から十八期の同志二十人を集めて「二葉会」という研究会を作りました。会合に渋谷のフランス料理店二葉亭をよく使つたので、この名前をつけたのですが、十八期でマレーやフィリピンの派遣軍司令官をして、戦犯裁判で死刑になつた山下奉文も参加しています。昭和四年には、二十期以降の若手の研究会「木曜会」に声をかけて「一夕会」、一つの夕方と書きますが、会員四十二人の大きな組織になつたのです。

しかも大きな特徴があります。第一に全員が陸大卒業生で、それも優秀な成績で卒業した者ばかりです。第二が幼年学校出身者で固めたこと。士官学校に入るには、二つのコースがありました。中学一、二年でまず幼年学校に入る者と、中学四、五年になつてから直接士官学校を受ける者です。幼年学校出には「自分たちは陸軍本流だ。中学出は促成教育を受けた将校だ」。こんな見下す意識があつたようです。「一夕会」には中学出は三人しかいません。陸大閥は同時に幼年学校閥でもあつたのです。第三に陸軍省や参謀本部などの勤務者、エリート中のエリートを集めたこと。第四は長州出身者が一人もないことでした。

面白いですね。大正デモクラシーの出発点になつた、護憲運動のスローガンは「閥族打破」でした。この「二葉会」にしても「一夕会」にしても、スタートは

「長州閥打破」です。そういう意味では、陸軍の革新を考えた彼らも、「時代の子」だったのかも知れません。そして宇垣も陸大閥も、共に総力戦に勝ち抜くための国家総動員体制を目指したのに、宇垣が「一夕会」から排斥されたのは、宇垣が田中義一に可愛がられ、長州閥の跡目を継いだと見做されたからです。この時期「一夕会」は、宇垣軍閥の中で孤立している真崎甚三郎、荒木貞夫を守り立てていこうと、申し合わせているのです。やがて「一夕会」は永田と小畑の主導権争いから分裂し、統制派と皇道派の対立となりました。青年将校たちが皇道派将軍の真崎や荒木を担いで二・二六事件へと発展するのですが、このことはいずれ詳しくお話したいと思います。

陸大閥はみんな頭もよく、國を憂える気持ちも人一倍強かったでしょう。そして幕僚中の幕僚で固めたのですから、昭和の陸軍を動かしたのも分かります。しかし、それが陸軍部内の主導権争いなら、「コップの中の嵐」ですみます。日本の不幸は、彼らが政治を動かさず、日本を動かさそうとしたことにあるのだと思います。関東軍が満州軍閥の張作霖の乗った列車を爆破した「張作霖爆殺事件」、この事件を起こした河本大作大佐も「二葉会」会員でしたし、満州事変を起こした関東軍参謀の板垣征四郎大佐、石原莞爾中佐も「一夕会」の会員でした。

出先の軍隊が勝手に火をつけて騒ぎを起こし、拡大していく。昭和の日本を戦争へと引つ張った、一番大きな罪は、この陸大閥にあったのですが、それは陸軍大学校という非常に狭い、限られたエリート選抜システム。その制度に欠陥があったからではないでしょうか。金融スキャンダルに揺れた大蔵省、日銀もそうでしたし、神奈川県警、新潟県警、埼玉県警といった警察官僚の不祥事もそうでした。自分たちが日本を動かしているという自負心が、いつの間にかおごりにつながり、「公僕精神」と云う官僚の原点を忘れさせてしまったのです。金属疲労、制度疲労を起こしてしまつたのです。

欠陥の第一は、陸軍の中核である陸軍省や参謀本部に行くには、この陸大ルートしかなかったことです。卒業生が毎年三、四十人と非常に少ないですから、結束も強い代わりに、身内同士のかばい合いが生まれました。張作霖爆殺事件で河本大佐を軍法会議にかけようとした時、強硬に反対したのが「二葉会」でした。昭和天皇に関係者の厳罰を約束した田中義一首相は、陸軍の反対でそれが出来ずに内閣総辞職に追い込まれました。河本大佐を軍法会議にかけて、厳正に処罰していたら、その後の陸軍の暴走は防げたでしょう。一度越権行為を見逃せば、次々と発生する越権に歯止めがきかなくなつてしまつたのです。

数少ないエリートだったために、失敗しても責任を問われず、またカムバックする無責任体制につながりました。昭和十四年のノモンハン事件で、日本陸軍はソ連の機械化部隊に圧倒され、大敗しました。その時の関東軍の作戦班長は服部卓四郎、作戦参謀は辻政信で、二人とも陸大の軍刀組です。ソ連の軍事力を的確

に見抜けず、些細な外モンゴル騎兵の越境事件を全面戦争にまで拡大させた、この二人の責任が一番大きいのですが、一時的に左遷されただけでした。敗戦は第一線部隊長の指揮のまずさ、敢闘精神の不足にあるとして自決を強要し、責任を取らせたのです。

太平洋戦争開戦の時、服部は参謀本部作戰課長、辻は戦力班長として返り咲きました。一度失敗しても、「あいつらは出来る」ということで、再び陸軍の中心ポストに座る。これでは「敗戦は圧倒的な火力の違いだった」という、ノモンハン事件最大の教訓は、その後を生かされるどころか、問題にされることもなかったわけです。ノモンハンのような局地戦でさえ負けたのですから、日本の国力、陸軍の実力を冷静に見る目があったら、とても太平洋戦争なんか出来なかったでしょう。その点アメリカでは、全く軍関係の学校を出ていない経済人でも、経済関係の部局に将官として起用しています。組織も制度も、常にこうしたよその血、外から見る目を入れる努力が必要だったのです。

第二に、陸大教育の欠陥です。ここでは実戦にすぐ役立つ参謀教育を重視したため、教えたのは六九%が戦略、戦術で、後は戦史などです。政治に関する学科はゼロなのです。士官学校でも教えていません。「軍人は政治に拘るべからず」の軍人勅諭の影響もあつたでしょうが、軍事は政治・外交と密接に結びついていきます。政治に拘らざるを得ない状況になると、これでは困ります。第一次大戦で帝国主義が否定され、紛争の平和的解決機関として国際連盟が出来ていました。そうした国際政治の流れは常に教えていなければいけなかつたし、大局的な物の見方を育てるべきでした。ところが陸大では「一旦固めた決心は断固貫く」、妥協排斥をよしとしました。確かに指揮官が命令をクルクル変えるようでは困りますが、政治も外交も妥協なのです。話し合いの中に妥協点を見付け、平和的解決に持っていくのが政治なのです。妥協を排斥し、戦って勝つことばかり教わってきた人たちが軍の中枢を握り、政治に口出しするようになったのですから、陸大教育の欠陥は大きかつたと云えるでしょう。

第三に、陸大閥イコール幼年学校閥の弊害がもろに出たことです。幼年学校の語学はドイツ語、ロシア語、フランス語の三か国語に限られ、英語は教えていません。日本の陸軍が最初はフランス式、やがてドイツ式に切り替わり、ロシアは常に仮想敵国だったからです。イギリス、アメリカは海軍国だし、英語は中学から士官学校に入る者で十分だと考えたのでしよう。ところが陸軍の主流を占めたのは陸大閥、それも幼年学校閥でしたから、ドイツ崇拜、英米軽視の風潮が強くなってしまったのです。

陸大卒業生のうち、成績優秀な一割くらいが諸外国に行っています。ドイツが百五十人と圧倒的に多く、フランス九十人、ロシア八十人に対して、イギリスは五十五人、アメリカに至っては四十人と、極めてアメリカに薄い海外駐在システ

ムになってしまいました。太平洋戦争開戦の時の参謀本部で、作戦部長の田中新一がソ連経験だけ、服部作戦課長はフランス、辻は海外経験なしです。もちろん外国へ行ったからと云って、それで外国が分かるものではないでしょう。しかしアメリカと戦争をするという時に、アメリカの国力をよく知っている者が、陸軍省や参謀本部の中枢にほとんどいないという結果になったのです。「アメリカは女の強い國だ。人種問題もあるし、戦争をいやがるだろう」。こう公言している参謀がいたそうです。敵を知り、己れを知るところか、両方とも知らないのですから、これもおごりからきたシステム欠陥と云えるでしょう。

第一次大戦の後、総力戦の体制づくりは、世界の指導者の常識になっていました。ただそれは、宇垣や陸大閥が考えたように軍事優先、軍部の都合のいいような体制づくりではダメなのです。ワシントン会議をまとめた加藤友三郎は「国防は軍人の専有物に非ず」。戦争は軍人だけでは出来るものではないし、国家総動員をして当たらなければならぬと云っていました。加藤は、だから軍備だけでなく、民間工業力を発展させ、貿易を奨励し、国力を充実させておかなければならないと云うのです。第一次大戦のフランスの首相クレマンソーは「戦争、そんな大事なことを軍人なんか任せておけるか」と云ったそうです。総力戦なればこそ、外交はますます大切になってきます。まず戦争をしないで済む努力が必要ですし、政治、経済、社会のあらゆる方面に配慮し、調節していかなければならないのです。それは政治が軍事をリードして、初めて出来ることなのです。

大正という時代は、混沌とはしていたが、様々な可能性を秘めていた時代でした。これまでもお話ししましたように、大正政変のさい桂太郎内閣を倒した「閥族打破・憲政擁護」の大合唱といい、寺内正毅内閣を倒した米騒動といい、どこにそんなエネルギーがあったのかと思うほど、たくましい時代でした。陸海軍の軍縮も行われたし、普通選挙、政党内閣制、二大政党時代も実現しました。ただその陰で、宇垣一成によって軍国化路線の枠組みが作られましたし、昭和に入って日本を動かす陸大閥が姿を現わしてきました。言論・思想弾圧の武器となった治安維持法も制定されました。ちよつとしたことで、昭和の日本は随分変わっていったのではないのでしょうか。

力のある政治家が、相次いで姿を消したことが実に残念でした。中でも原敬の暗殺です。原が健在だったら、恐らく陸海軍大臣の文官制が実現していたでしょうし、政党政治ももっとシンのある、しっかりしたものになっていたでしょう。実行力のある山本権兵衛内閣がシーメンス事件で倒れたのも痛かったし、見識のある加藤友三郎が病気で、短命内閣に終わったのも残念なことでした。この話の続きは、陸軍がいよいよ政治の表舞台に顔を出してくる「張作霖爆殺事件と田中義一内閣」と云うテーマで話したいと思います。